

マッサージセラピーと十九世紀のセクシュアリティ」。

第三部「二十世紀―回帰の欲望と技術の夢想を超えて」には、次の六本。武藤浩史「一九〇〇年英国の身体なき声と声の身体―西洋近代における感覚的欲望の意味と系譜」、遠藤不比人「〈欲動〉の美学化とその不満―フロイト、ウルフ、不気味な身体としての〈歴史〉」、マーガレット小菅信子「〈戦死体〉の発見―人道主義と愛国主義を包擁させた身体」、萩原真一「オルダス・ハックスリーと単為生殖のデイス／ユートピア」、樽沼範久「フライトシュミレーター」のヴィジョン」、坪川達也「感覚と欲求―魚の脳から人間の脳まで」。

新しい世代を惹きつけている「医学史」と、本学会の多くの会員諸氏の了解しているであろう「医学史」との絶望的な懸隔が表題から浮かび上がってきたらうか。評者は、興味の赴くままに科学史・医学史と渡り歩いてきたこともあり、自己の問題関心と視野を特定の狭い領域に限定しないように努めてきたつもりなのだが、それでもやはり、こうした全ての論考に共感をもちつつ付き合うには、かなりの努力を要した。

一方で興味深い論考も極めて多く、一つだけあげるのには躊躇いがあるのだが、マーガレット小菅信子さんの「〈戦死体〉の発見」が実に面白かった。何十年前、ウィリアム・ハーヴィの事跡を求めて訪れたフォークストーンで何度も「Road of Remembrance」の急坂を行きつ戻りつしつ、戦死した若者を悼むモニュメントはなぜ第一次世界大戦のものか

圧倒的に目につくのだろうと不思議に感じたことがあったからだろうか。死者の身体に対して日本人は本来、欧米人とは異なる感覚をもつゆえ、臓器移植は日本では定着しがたいのだというような雑駁な議論を吹き飛ばす力を、この論考はもっている。身体感覚を伴って得た疑問を史料に基づき丁寧に解きほぐしていつてくれるような論考は、やはり面白い。

「身体文化研究会」の現在進行中の二〇〇二年度のテーマは「腐敗と再生」とのことである。本書の序章で編者たちの述べている「従来の〈医学史〉のもつ〈好事家たちの狭隘なかびくささ〉」の鋭い分析が提示されるかもしれない。その際には、この若い世代によって、再生の具体的な処方箋もあわせて語られることを期待している。

(月澤美代子)

〔慶應義塾大学出版会、東京都港区三田二一九―三〇、電話〇三―三四五一―三五八四、二〇〇二年五月二〇日、A5判、四六二×xvページ、四八〇〇円〕

岡田 靖雄 著

『日本精神科医療史』

待望の一書である。わが国の精神科医療の歴史をこれだけの質と量で、単独の著者がまとめた書物は未だかつてない。この書物によってわが国の精神科医療の歴史研究はやっとス

スタートラインに立つことができたのだと考える。岡田氏は「わたしのは幹をかいただけである」と述べている。しかし、「幹」があればこそ参照の基準を手に入れることができる。もちろん、この「幹」をどのように参照するかは読者にゆだねられている。以下ではわたしの参照のしかたを述べながら、本書の紹介に代えたいと思う。

本書は「第I篇 江戸時代前」、「第II篇 江戸時代」、「第III篇 戦前」、「第IV篇 戦後」の四篇からなり、岡田氏の言葉を借りれば「前半は学説史で、後半は法律・制度史」という切り口の違いがある。江戸時代までの学説史の部分は、原典を忠実に紹介する形ですすめられている。養老律令から始まり、「病草紙」を経て、『癲癇狂経験編』等に至る展開自体はおそらく正統派的な記述なのだろうが、さまざまな文献から引用された「癲狂」の網羅的な記載はさながら百科全書の体をなしている。第I篇・第II篇の時代に暗いわたしには、人名・地名・書名・漢語・和語の嵐を消化しきれないが、事典として使うのだと割り切れば素人にも大いに役立つ。

しかし、それにもまして岡田氏の本領が発揮されるのは、第III篇・第IV篇の明治以降の法律・制度史であろう。わたしが見るところこの法律・制度史の原型は『精神医療』（岡田靖雄編、勁草書房、一九六四年）あるいは『わが国における精神障害の現状』（厚生省公衆衛生局、一九六五年）に早くも示されている。また、この原型は各年度版の『我が国の精神保健福祉』（精神保健福祉研究会）の「精神保健福祉行政のあら

まし」に連続と引き継がれ、わが国における精神科医療史の標準的な理解を支えてきた。本書においても、『精神医療』等に示された基本姿勢を貫いている。もちろん、各章の文献を一見してもわかるように、その後の岡田氏の数多くの研究成果に裏打ちされた本書の法律・制度史の記述が、より豊かなものになっていることはいうまでもない。

さて、「第III篇 戦前」の最重要キーワードは相馬事件と呉秀三であろう。本篇はこの事件と人物を中心に繰り広げられた精神病患者監護法と精神病院法に代表される法律・制度の議論を軸にして構成されていると言えよう。「当時でた本でわたしがあつめたものを今回かぞえると、三十三冊あった」という相馬事件の「コレクター」でかつ呉秀三研究の第一人者である岡田氏ならではの記述である。また、本篇の第五章では統計資料の話題がとりあげられている。精神科医療の基本データとなるべき患者数、病院数、病床数の統計上の不備が示され、「付章」でも指摘があるが今後の研究に余地を残していることがわかる。

一方、「第IV篇 戦後」は精神衛生法を中心に展開している。戦後の精神科医療の転換点である一九六〇年前後に確立し、今日まで尾を引いている「六〇年体制」への批判に重点が置かれているといえる。しかも、ある時期からは「自分自身がかかりかかっていた」という微妙な立場にあつての記述である。精神衛生法改正をめぐる精神科医たちの態度が生々しく描かれ、国の制度・政策がどのような雰囲気なのか

で決定されていくのかをうかがい知ることができる。俗な読者としてはさらに知りたい部分だが、本書の性格からして記述にも限界があるろう。近い将来、岡田氏の『私録精神科医療史』が刊行されることを期待したい。

最後にページ数こそ少ないが第IV篇に続いている「付章精神科医療史研究の意義と課題」に言及したい。わたしは精神医療史（精神科医療史ではなく、岡田氏がかつて使用していた名称を使わせていただく）の領域で研究をしている者として、真つ先に「付章」から読み始めたからである。ここでは、呉秀三らによる私宅監置室調査の内務省本（タイトルは「精神病者私宅監置ノ實況」、一九一八年）の発掘が岡田氏の歴史研究の出発点であったことが書かれている。精神衛生法改正のころ日本精神神経学会の指導的立場にあった人が「『ぼくは呉さんのようなへまはやらんよ』といいながら、そのあとはこの論文をかつきまわっている」ほど、今日では有名になった論文である。「これを無視してきた日本の精神医学とはなんだったのか」と問う岡田氏の言葉は、これまで歴史研究がいかに軽視されてきたかを示すものだろう。わたしに言わせれば、この呉・榎田論文は未だに無視されている。タイトルを知っている者のなかで、一行でも原文を読んだ者はどれだけのいるだろう。繰り返しになるが、歴史はただ過ぎ去った事柄ではなく現在や未来のためにあるのだという認識が貧困な風潮にあつて、本書が刊行された意義は大きい。

（橋本 明）

〔医学書院 東京都文京区本郷五―二十四―三、電話〇三―三八一七―五六〇〇、平成十四年九月一日、B五判、二七四頁、定価六八〇〇円〕

新村 拓 著

『痴呆老人の歴史』

著者は古代から現代にわたり、日本人の死生観の変遷を古典文学、古医書類を通じてたどり、一連の「日本医療史研究」を著作公刊している。本書はその中で「痴呆老人」に焦点をあててまとめたものである。本書の構成は八章からなり、第一章は前言、第二―五章は明治前の老人とその生誕の中から痴呆を抽出し、その介護の様相を読者に伝えている。第六、七章は西洋医学が導入されて痴呆の実情が鮮明になり、介護の変遷を加味して論述しており、第八章では戦後における痴呆老人に対する社会福祉の対応が論ぜられ、付論として老人の終焉に深く関わる「死の臨床と安楽死」が取り上げられている。各章毎に文献が詳細に記述されているので、後学者にとって極めて有用である。

中近世にあつては「源氏物語」などの古典から痴呆を「ぼけ人」、「老耄」として老いの運命が表出されており、中国渡来医書を通覧して「恍惚、狂言妄語、健忘」を痴呆の具現として論じ、これは中風の随伴症状として理解されている。評